

意見陳述書

2013(平成 25 年)5 月 31 日

佐賀地方裁判所民事部合議 2 係 御中

アーサー・ビナード

- 1 私はアメリカ合衆国の、ミシガン州に生まれ育ち、高校生のころから、英語で詩を書き始め、大学では英米文学を専攻しました。四年生のときに、ひよんなことで日本語に出会い、平仮名と片仮名と漢字に魅了され、日本語の豊かな響きにひき込まれました。卒業と同時に来日し、それから 23 年間、人生の半分をこの列島で、日本語と向き合いながら過ごしたことになります。私の世界の見方は、日本語を習得することで大きく変わりました。中でもとりわけ大きく変化したのは「原子爆弾」と「原子力発電」の捉え方でした。
- 2 「原爆」と「原発」は、同じ核分裂の連鎖反応を用いて同じ放射性物質を作り出します。当たり前のことですが、私にとって、広島の人々が生み出した日本語が、その同一性を理解するきっかけとなりました。原爆と原発が同じ根っこであるという大事な視点をぜひこの裁判でも生かし、本質を表す言葉で玄海原発の問題を捉え、考察していただきたいと思い、意見を述べます。
- 3 私はアメリカの教育の中で「原爆投下は必要だった」と繰り返し教えられてきました。その定説を、私は完全に信じ込んでいたわけではありませんが、否定するだけの視野もありませんでした。当時の私は「原子爆弾」のもとになった **Atomic Bomb** と「核兵器」と訳された **Nuclear Weapon** という、そんな表現しか知らなかったのです。

4 日本に来て数年が経ってから、私は広島を訪れました。平和記念資料館では、1945年8月6日、核分裂の連鎖反応にさらされた人の話を初めて聴きましたが、その女性は、「原子爆弾」や「原爆」ではなく、「核兵器」という言葉も使いませんでした。彼女は広島の上空で引き起こされた現象を「ピカドン」と呼んだのです。私にとっては、ついぞ聞いたことのない単語でした。けれど、その意味は瞬時に伝わってきたのです。

広島で覚えた「ピカドン」を私は自分で使ってみて、立ち位置が変わることを実感しました。「Nuclear Weapon」も「核兵器」も「Atomic Bomb」も「原子爆弾」も、核開発を進めた人たちが作った呼び名です。落とす側、核分裂を利用する側の視点と都合が最初から組み込まれています。他人事として捉える言葉で、たとえば「エノラゲイ」の爆撃機からキノコ雲を見下ろす印象です。それに対して「ピカドン」は広島的生活者が、自らの焼かれた皮膚とずたずたに切られたDNAをもとに、日本語を鋭く豊かに響かせて、生きた言語感覚で本質をつかんだのです。3日後、異なる核分裂性物質のプルトニウム 239 が長崎の生活を奪ったときには、「ピカドン」という名称はすでにあっただといいます。

英語にない「ピカドン」を使うと、私たちは、67年前の広島に、長崎に立たされます。言葉の選択一つで、私たちは実態を正確につかみ、視点を変えることができるのです。

5 それと同時に、広島の「ピカ」と長崎の「ピカ」の意味の違い、つまり広島のウラン 235 と長崎のプルトニウム 239 を冷静に捉えれば、この玄海原発差止めの裁判で何が問われているのか、自覚することになると思います。ウラン 235 は、自然界で唯一とれる核分裂性物質ですが、鉾山から掘り出したウラン鉱石は99%以上が核分裂しないウラン 238 です。

核開発も原子力開発も，ウラン 238 を捨てて 235 を残す「ウラン濃縮」と呼ばれる作業から始まります。ところが 2 種類のウランを使えば，自然界に存在しないプルトニウム 239 を人工的に作ることも可能です。

ウラン 235 の核分裂から出る中性子をウラン 238 の核に当てると，分裂しない代わりにウラン 238 は，凄まじい核分裂を起こすプルトニウム 239 に変身します。問題は，ウランが爆発するとプルトニウムも広範囲に散って集めることができません。どうやって爆発を伴わない原爆で，より凄まじい原爆の原料を量産するかが，マンハッタン計画の最大の課題でした。

「ドン」を抜いた「ピカドン」，「爆発」抜きの「原子爆弾」として開発されたのが「原子炉」という装置。1942 年に組み立てられ，ウランの核分裂によるプルトニウム作りが 2 年と 8 ヶ月ずっと行われ，1945 年 8 月 9 日に長崎で引き起こされた大量虐殺は，「原子炉」の本質，そもそもの成り立ちなのです。ただし「原子炉」と呼ばれるようになったのは原爆投下よりずっとあとのこと。

「ピカドン」に対し，同じ核分裂を「ドン」抜きにゆっくりやる装置を，本当は「ジリジリ」と呼べば，わかりやすいと思います。あるいは素直に「プルトニウム作り機」と言っても本質が伝わるはずですが。しかし「原子炉」という言葉に偽装されて，「発電機」として売り込まれ，この日本列島にも 50 基以上，設置されました。たしかに，湯沸し機能をつけてタービンを回し，発電しているのは事実です。けれど突き詰めれば，その電力はカモフラージュにすぎず，原発は核開発利権の維持のために存在するのです。

- 6 プルトニウムは「発電」の名の下に，「原子炉」の中でジリジリと作られます。長崎と広島に黒い雨として降った核分裂片も，大量に生み出

されます。たとえ施設内で安全管理の下で核分裂を起こしていても、プルトニウムの半減期は2万4千年。人間の英知をはるかに超えた時間軸で、環境に漏れ出さないよう管理することはできません。政府と電力業界はそんな物質を「使用済み燃料」と呼びますが、燃焼しないものなので「燃料」ではないし、生き物の被曝は続きますから「済み」も現実と異なります。

7 私は詩人として、日本語の素晴らしい工具箱を毎日使っています。裁判に携わる弁護士も裁判官もみな、言葉を使って現実を捉え、それを表現しようとしています。私たちの日本語が、ものごとの実態とつながっていれば、法律の営みも文学も営みも成り立ちます。しかし言葉が現実とかみ合わない、ペテンの道具に成り下がっている現在、まともな詩作品も、まともな判決も、世に出せない危機的状況に陥るのではないのでしょうか。

8 私は、ペテンを見抜いて言葉を紡ぎたいと思います。玄海原発の裁判で問われていることは、この地で、長崎のピカドンの原料作りをジリジリと続けるべきかどうかです。日本語が生き残れるかどうかも、司法と文学に携わる者の、言葉の選択にかかっていると思います。

以上